

トゥールミンモデルを活用した説明的文章における読みの効果

村 高 聡 子

本稿では、説明的文章における要旨や要点の把握において、学習指導にトゥールミンモデルを活用することで、生徒は説明的文章の内容や構成、論理の展開について叙述を基に適確にとらえ、主張と論拠など情報と情報との関係についてつかむことから、読みが深まることを理解し、得た活用の視点を次の読みに能動的に生かそうとできるか、高等学校1学年の教材、評論文「広告の形而上学」(岩井克人)、「メディアがつくる身体」(荻上チキ)を取り上げて検証した。結果、学習時に行った問いを立てて読む活動の振り返り、初読の感想と学習を終えての感想の変容から、モデルを活用することで文章の構成、論理の展開について把握でき読みが深まったと自覚し、今後の読みに生かしたいという意欲や、両教材を比較して文章構造の違いに気づく見取りが可能な記述が見られた。

1 問題設定

「高等学校学習指導要領(H30年告示)解説国語編」では、必修科目「現代の国語」において、「知識及び技能」の(2)「情報の扱いに関する事項」のうち「主張」と「論拠」は定義づけられ、求められている指導内容である。また、選択科目「論理国語」における「知識及び技能」の(2)「情報の扱いに関する事項」の指導事項にも「主張」「反証」「推論」という用語によって記述される。間瀬茂夫(2019)^{注1)}も述べるが、これらの用語は、トゥールミンモデルに基づく用語であり、論証に関する指導が求められているといえる。

そこで、説明的文章における読む能力向上を図る授業展開にトゥールミンモデルを活用し、文章の構成、論理の展開について叙述を基に的確にとらえ、情報と情報との関係についてつかむことから、読みが深まることを理解し、且つ得た活用の視点を次の読みに能動的に生かそうとできるかという、効果を検証した。本稿で報告するのは、広島大学附属高等学校第1学年5組41名を対象に、令和2年10月に実施した評論文「広告の形而上学」(岩井克人)、「国語総合現代文編」東京書籍)及び同年12月に実施した評論文「メディアがつくる身体」(荻上チキ)(同)の授業実践である。対象者に対してトゥールミンモデルを活用した指導はこの2回である。

2 トゥールミンモデルとその活用について

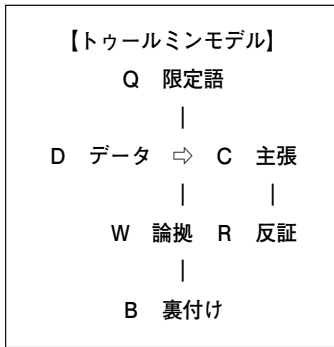
(1) トゥールミンモデル

トゥールミンモデルはイギリスの哲学者ステイブン・トゥールミンの論証のモデルである。富田英司・丸野俊一(2004)^{注2)}は、

Toulmin(1958)は、日常的文脈に適用可能な論理学を目指し、現実世界での推論をより確実なものにしようとした場合に満たすべき基準を、法廷での論証過程をモデルに提案した。法廷は、理性的で可能な限り確実な判断が求められる日常の場面の典型であるため、そこで行われている論証の過程を一般化すれば、日常の論理の一般的基準を明確にすることができる、と彼は考えたのである。

Toulminによると、ある命題が理性的な判断によるものであると見なすためには、主張(claim)、データ(data)、保証(warrant)、保証の裏付け(backing)、限定詞(qualifier)、反証例(rebuttal)という6つの要素から構成された論を組み立てる必要がある。「主張」とは、結論として述べたいことを指す。「データ」は、主張の正しさを支える論拠となる事実であり、「保証」は、データがなぜ主張内容の論拠となりうるかを示すものである。さらに「保証の裏付け」は、保証の妥当性を示すための理論や法則、規則といった一般原則を指す。「限定詞」は、主張内容がどの程度確実であるかを示し、「反証」は主張に対して存在しうる例外を示し、主張の適用範囲を特定するものである。

と、トゥールミンの理論的枠組を紹介している。トゥールミンの論証モデルと指しているものはこのことである。間瀬^{注1)}は、モデルを図式化したものを示している。(次頁図。)トゥールミンモデルの授業への活用の仕方として、①教師の教材分析のツールと、②学習者の思考ツールの二通りが考えられる



が、②を選択し、実施した。理由は、説明的文章全体について、特にモデルのDデータ、C主張、W論拠、B裏付けの要素となる内容をつかめれば、説明的文章の構成、論理の展開について把握でき、

読みを深めることにつながると捉え、そのためには、学習者自身がツールミンモデルを図式化してデータと主張と理由のつながりを示せることが必要であると考えたことによる。論証モデルを知ることは、文章をメタ的に捉えて評価・批評する力の育成にもなるだろう。

(2) ツールミンモデルから見た教材の特徴

「広告の形而上学」を教材A、「メディアがつくる身体」を教材Bとして、以下にそれぞれの教材の文章構造と論証の特徴を述べる。

教材Aは5章立ての文章であり、各章毎に空間によって区切られている。いわゆる評論文の「導入・展開・まとめ」の構造で、具体例や比喻を織り交ぜて書かれているものである。学習者は文章構造の既習内容を生かしやすく、問題提起や筆者の主張を捉えやすい。特に「マルクスの言葉」「ソシュールの言葉」の引用によって例が示されている。その例示の意味を理解し主張とのつながりを理解することで読みが深まる。ツールミンモデルを活用して、その要素を押さえる読み取りが、読みを深めるのに適切であると判断した。生徒には、D根拠、C問題提起に対する主張、W論拠、B裏付けを図式化したワークシートを提示した。Dを根拠と示したのは、年度当初から生徒に対し、根拠と理由（理由付け＝論拠）の違いを明確にして意見の構築を図る指導を行ってきたことによる。

教材Bは、大きく前半と後半で筆者の論が分かれている。前半の主張が論拠となって、後半の主張を支えている構造になっている。ただ、筆者の文章の書き方の特徴として、次々と繋げていくように書いてあり、問題提起を明確につかみづらい。「導入・展開・まとめ」という枠組みでは捉えにくい。また、「国語総合現代文編」評論・随想指導書補説^{注3)}では文章構造について以下のように記している。

段落とパラグラフは同じものようであるが、概念としては大きく異なる。学校では専ら「意味段落」と「形式段落」とを区別して教えるが、パラグラフの概念においては「意味段落」

と「形式段落」は本来は一致していなければならないと言える。一つのパラグラフにおいては一つのトピックを扱い、それを積み重ねることで論理を構築していくことが西洋の論述の基本的な考え方だからである。(略) 荻上の文章は基本的に先行の話題を、キーワードとなるタームを逐一差し込み、あるいは言い換えながら、論理を繋げていくスタイルで書かれている。(略) といえ、荻上の文章は、西洋的なパラグラフ・ライティングが徹底されているというわけでもない。「一つのトピック」が終わるまではパラグラフを改めないそれに対して、荻上は一、二文で改行してしまう。これはむしろ、一文で改行し、空白行でブロックを形成する、インターネットのブログ文体に近い。

近年のネット環境上によく見受けられる構造的特徴を備えた文章ということである。今後の社会情勢の方向性を考えても、わかりにくい問題提起と主張をつかめるよう論のつながりを意識して読む取り組みが必要と考え、それが仕組めるツールミンモデルの活用へと考えが至ったのである。生徒への提示の仕方については、まず、前半部分をワークシートによりD根拠とW論拠とC前半の主張の関係を図式化させ、その後、本文全体のW論拠とC主張の関係を図式化させる。

以上、特にABそれぞれの下線部における文章構造を押さえた読みが、モデル活用によって深まったことを検証するため、以下の授業展開を設定して実践を行った。

(3) 学習指導の可能性

教材Aを扱う単元を「単元1」、教材Bを扱う単元を「単元2」とする。1、2両単元とも要旨や要点を把握するために、評論の内容や構成、論理の展開について叙述を基に適確にとらえ、主張と論拠など情報と情報との関係について読み取ることをねらいとした単元として設定した。H30 高等学校学習指導要領の以下の指導事項を受け設定している。

【指導事項】現代の国語

〔思考力・判断力・表現力等〕C読むこと

ア 文章の種類を踏まえて、内容や構成、論理の展開などについて叙述を基に適確にとらえ、要旨や要点を把握すること。

〔知識及び技能〕(2) 情報の扱い方に関する事項

ア 主張と論拠など情報と情報の関係について理解すること。

また、指導の工夫についても、両単元とも以下の3点に揃えて重点を置いている。

① 単元の大きな問いの設定

単元1「論証モデルを活用して要点をつかむ」

単元2「問題提起をつかむ」

② ①の解決をねらって、生徒自身が疑問を持ちよりグループで問いを立ててから読む。

③ ツールミンモデルを図式化した論証ワークシート^{注4)}を活用する。

これらはツールミンモデルを生かし、論のつながりを意識しながら能動的に読みを深める指導を仕組むためである。また随時話し合い活動を取り入れた。読みの解釈の交流は読みの意味を構築する思考過程を交流可能とするからである。

3 単元1における授業の実際

(1) 単元1の授業展開

次に挙げるものは実施した単元1の指導内容と前節(3)「学習指導の可能性」における指導の工夫②の、指導に活用した生徒が立てた「問い」①～⑨である。〔 〕で記した〔主張1〕等の言葉は、前節(3)指導の工夫③の生徒に配布した論証ワークシートで使用している言葉である。(資料I：参照)

＜指導内容全6時間＞

一次

- 一時・初読の疑問を持ち、交流する。
 - ・単元目標「論証モデルを活用して要点をつかむ」を達成する問いを選出する。

二次

二時・ツールミンモデルを知り、一学期学習済み教材：評論文「技術が道徳を代行する時」に対してモデルを活用して論証をする。

三時・問題提起とそれに対する答え〔主張1〕と〔主張1〕に対する筆者の意見〔主張2〕をつかむ。

- ① 形而上学的な奇妙さとは何か。
- ② 逆説的な点はどこなのか。
- ③ なぜ広告には「形而上学的な奇妙さ」があるのだろうか。

- ・本文の論証をする。(論証ワークシート配布)(個人→グループ活動)
- ・〔根拠1〕〔根拠2〕をつかむ。

- ④ 広告の差異性とは何か。

四時・〔裏付け〕をつかむ。

- ⑤ 差異は何と何の差のことか。また、差異の生み出す価値とは。
- ⑥ 「動物」の例を使った上で文章を通して何を伝えたいのか。
- ⑦ p 110, 111とp 114, 111にある「動物」という表現の意味とその差異。
- ⑧ 「『動物』なるものが闊歩しているが」とあるが、筆者は動物に「」をつけることによって何を強調しているのだら

うか。

五時・〔論拠〕をつかむ。

- ⑨ 筆者の考える価値は何か。

三次

六時・単元目標を確認し活用した問いを振り返る。

→ 交流

・モデル活用についての感想を持つ。

(2) 分析と考察

前節(3)における指導の工夫①②についてである。授業展開のどの部分で①～⑨を考え、読みに役立っていたのかを記している。

計画では、まず、文章構造の既習内容である、問題提起とその答え〔主張1〕とするものと、〈導入・展開・まとめ〉の基本構造で〈まとめ〉に置かれることの多い、〔主張1〕に対してや、論の主題に対しての筆者の意見〔主張2〕を指摘させた後に、モデルを使って〔主張1〕の〔根拠〕→それを支える〔論拠〕→その〔裏付け〕の順で探させようとした。しかし、既習内容である具体例を指摘する方が探しやすかった様子で、本節(1)に記す指導の順番のように、〔論拠〕より先に〔裏付け〕に取り組み、最も難しかったのが〔論拠〕のようであった。二次の二時目にパワーポイント資料や紙媒体の資料でツールミンモデルの説明をし、既習済みの評論文「技術が道徳を代行する時」(「国語総合現代文編」東京書籍)を使ってモデル活用の練習をした。しかし、〔根拠〕と〔裏付け〕の違いについて混乱している生徒もいた。〔主張1〕の〔根拠〕から探すと、「マルクスの言葉」の引用の例示と「ソシュールの言葉」の引用の例示がワークシート内に表れず、文章全体では何が言いたいための例示なのかを考えるきっかけとできた。そこから、これらの例示は〔裏付け〕に当たるだろうと予測し、〔論拠〕にたどり着いた。指導者の所見は、大半の生徒は図式化したモデルにより、〔論拠〕は、何について探せば良いのかは分かったが、何が〔論拠〕なのか指摘するのが難しかった様子であった。

つまり、モデルを、文章全体の要点を理解する上で、何について理解をすれば、読みを深められるのかという手がかりとできたということである。前節(2)「ツールミンモデルから見た教材の特徴」において教材Aの下線部の理解に役立てられたとすることが可能と見た。もっとも、⑥⑦の問いが立っているようにマルクスの「動物」の例えが何であるかをつかまなくてはならないが、論のつながりから、捉えやすくなったと考えている。その根拠として、単元終了時に、生徒は自ら立てた問いの振り返りを

行っている。その中で、前節(3)の指導の工夫③を通したモデルを活用した読みに有効に作用した問いとして評価をしている記述があった。以下ア・イに生徒の記述例を記す。一重傍下線部がそれに当たる部分である。

単元1

ア ④⑤の問い、そして⑥⑦⑧の問い(差異に関する問い、動物に関する問い)は特に文章を深く解釈するのに役だった。この文章を理解することで最も重要だったのは、差異が何の何を表しているのかを理解することだったと思う。また、理由付けと裏付けを理解するのに⑥⑦⑧の問いは役だった。問題や話題そのものを理解するには①②が必要だったが、他の問いよりも個人的には難しく感じられた。「形而上学」「逆接的」などの言葉の意味そのものがよく分かっていなかったからだと思う。

イ (①②③の問い) 最初に読んだ時はカタカナや複雑で聞き覚えのない言葉ばかりであり理解できていなかったが、論証分析表を用いて問いを解決していくうちに一つ一つ整理されていき、その整理するきっかけ・キーワードになったと思います。また、文のつながりも感じられました。

4 単元2における授業の実際

(1) 単元2の授業展開

次に挙げるものは実施した単元1の指導内容と「2(3)」における指導の工夫②の、指導に活用した生徒が立てた「問い」①～⑧である。(資料Ⅱ：参照)

< 指導内容全6時間 >

一次

一時・初読の感想と疑問を持ち、交流する。
・単元目標「問題提起を捉える」を達成する問いを選出する。

二次

二時・問題提起を考えて予測し、それに対する答え〔全体の主張〕をつかむ。
・「社会的身体」の意味を確認する。
① 「社会的身体化」とはどのようなことか。「社会的身体」とは何か。
・文章の構造：内容が前半と後半に分かれることを確認する。

三時・前半の論証をする。(前半論証ワークシートを配布)(個人→グループ活動)

・〔根拠〕をつかむ。
・〔論拠〕とその〔裏付け〕をつかむ。
・〔前半の主張〕をつかむ。

② p 128 1 5 コミュニケーションによって作られる、予期の織物のような存在とは何か。

四時・全体の論証をする。(全体論証ワークシートを配布)(個人→グループ活動)

・〔全体の主張〕を再確認する。
③ 結局作者はメディアや社会的身体についてどんな考えを持っているのか。(肯定なのか否定なのか)
・前半の主張が図式内のどの〔論拠〕に当てはまるか考える。
・〔根拠〕と〔論拠〕をつかむ。

三次

五時・問題提起を確認する。

④ p 130 1 6 「今や、全ての身体は、象徴的な義体」とはどういうことか。

⑤ p 130 1 10 「そのイメージそれ自体」とはどういうことか。

⑥ p 126 1 6 「示唆的」とは何を示唆しているのか。

六時・初読の感想・疑問を振り返り学習後の感想を持つ。→ 交流

⑦ 人間がメディアを操るのではなく、メディアが人を操っていることになるのか。

⑧ 特定のメディアが社会的身体化され、それを前提として社会が進んでいる現代のような状態でいいのか。

・活用した問いを振り返る。→ 交流

(2) 分析と考察

「2(3)」における指導の工夫①②についてである。授業展開のどの部分で①～⑧を考え、読みに役立っていたのかを記している。

まず、単元目標を提示するときに、初読で問題提起は何かを予測させている。交流をさせて、問題提起は最初の1文ではないことを確認してから、さらにそれを踏まえ、これまでの読みの経験を生かして、〔全体の主張〕を予測させた。生徒は既習を生かして指摘できていた。指導者はこの時点で、先に〔全体の主張〕を確認してから、それを証明する形で、論証して問題提起を導くように指導をした。

文章全体を論証するとき、ポイントとなるのは〔前半部分の主張〕が〔全体の主張〕に対してモデルのDの部分にあたるのか、Wの部分にあたるのかを判

断するところにある。しかし〔全体の主張〕を明確にしたため、話し合いでモデルの位置が見えていたグループも多くみられた。図は完成し、それを手がかりに問題提起を考えていった。問題提起を表現することが難しく、文章の最初の形式段落1段落のある部分と関係しているように感じるのに、指摘できない。立てた問い④⑤⑥が〔全体の主張〕と問題提起に関係しているのだからそちらの解決から考えた。改めて完成した全体のモデルに戻り、「モデルでいくと、具体例から図の左の〔論拠〕のようなことが言える。これを根拠にメディアが社会的身体というイメージを変えるから人々は論争してしまう。なぜ？理由は？・・・と聞かれたら、図の下の〔論拠〕は、社会的身体は短い期間で姿をかえて、コミュニケーションによって作られるものだから、と答えることになる。問題提起は何か。どういう質問だったら、これらの論のつながりで答え〔全体の主張〕とすることができるのか。」と、指導者が生徒に問いかけ、論証のモデルから問題提起を考えさせたところ、「なぜ新しいメディアは論争を起こすのか」という問題提起にたどりついた。この文言は本文中にない。これにあたる問題提起を本文中の言葉を使って説明するとどうなるかということも考えさせた。生徒はモデルから読み取れた問題提起が本文中からも別の表現ではあるが、言えることをつかんだ。

つまり、本文中に明確に書かれていない問題提起を、モデルで示せた論のつながりから読み取ることが明示できたと考えている。「2 (2)」において教材Bの下線部の理解に役立てられたとすることができるであろう。根拠として、単元終了時に行った、問いの振り返りから、「2 (3)」の指導の工夫③を通じた読みに有効に作用した問いとして評価をしている記述があった。以下ウ・エに生徒の記述例を記す。傍下線部がそれに当たる部分である。

単元2

ウ ①②④⑤の問いは筆者の主張やそれを支える根拠を理解するのに役立つ問いだと思う。筆者はメディアの登場について善し悪しを述べていないからこそ読者に⑦⑧のようなことを考えて欲しいのかなと思う。

エ 問いの質について良かったものを挙げるとすれば②④⑤⑥だと思う。なぜかというところ、⑥はこの文章の問題提起に関わってくる部分で、ここを考えることで実際に問題提起を理解しやすくなったから。

②は、前半の主張の比喩であり、これを理解することでより前半の主張について詳しく考え、理解できたから。

⑤は全体の主張の部分であり、筆者が何を言いたいかを知る手助けとなったから。

④は筆者がはっきりと言い切っている部分で、ここを理解することで、全体の主張への理解がスムーズに進んだから。

①②⑦⑧は、答えが無かったり、そのまま本文に載っていたり等、問いとして不十分だったと思う。

・つまり、前節(2)「分析と考察」本節(2)「分析と考察」を通して生徒記述ア～エの一重傍下線部の問いの評価は、モデルを活用した思考において、問いを解決したことが有効に働き、理解が進んで読みが深まったと感じたことを表している。よってモデル活用の効果はあったと考えている。

5 単元1, 2の指導を通してみた成果—初読と読み終えての感想の変容及びツールミンモデル活用の振り返りから—

(1) 単元2における感想の変容からの成果

モデル活用の授業展開として2回目となる単元2で、初読から学習後の感想を書かせたところ、クラスの生徒39名は理解ができ読みが深まった感想を述べていた。その読みが変容した原因について、21名の生徒の記述から、「ツールミンモデルを使ったから」「文章のつながりを考えた」と構成に関することをつかんだ理由を挙げているものや、「論拠・根拠を探したから」と論証に使用しているキーワードを使った説明で理由を述べているもの等、モデル活用による理解の深まりを挙げたものが見られた。(※資料Ⅲ：参照)ただし、単元目標である「問題提起を考えた」や「主張が分かったから」のみは、情報と情報の関係性を明示している記述とは言い難く、それらはカウントしていない。

少なくとも2回の授業を通して、クラスの半数以上の生徒が、読む時に、論のつながりを考える視点を持つことが、読みを深める助けになることを自覚した表れと言えるだろう。

(2) ツールミンモデル活用の振り返りからの成果

単元1, 2それぞれの終末にモデル活用における読みの深まりについてどのような意見を持つか尋ねたアンケートを実施した。以下は生徒の記述例である。

単元1

オ 論証を使うことで、筆者の主張や論理がより明白になり捉えやすかった。また、裏付けと論拠の内容をより深く理解し、例について正しく考えることができるようになったため、主張だけでなく、根拠の裏付けや論拠について捉えることができた論証の方法は、この文章を読み、より深い理解をする方法として適していると感じた。初めは、この文章を理解できなかったが、論証によって理解することができたため、便利だと感じた。しかし、自分一人で論証することは難しいと感じた。

カ 文全体の構造がつかみやすいので、筆者の言いたいことや主張を念頭におきながら文章が読め、その点で文章の把握がしやすいと思った。しかし、評論など文章に特徴があったり、単語が難しかったりすると、そもそも一文の一文を読みにくく思って、構造の捉え方に差が出てしまおうと思ったので、いきなり（ワークシート）の空欄を埋めるよりは単語の意味や流れをもっと捉えてからやりたいと感じた。

キ 文章を、トゥールミンモデルを使って解析し、論証する事で筆者の意見や考察が深く読めたと思う。少なくとも、普段のように平たく根拠だけを求める読み方よりは文章が立体的に見えた。難しい文章だったが、読みを深める事（内容理解）は初読に比べ格段に進んだ。また、広告の二重性、というのが真の考察と（文章内では）されるが、その二重性について更に評価、解析、考察していく（文章から更に論証をつなげていく）考えの人がいたので、それも筆者の考えを深めることができるなどと思った。論証のスキルが身につけている証拠でもあると思う。

単元2

ク 論証プリント（モデルを示したワークシート）を使うと、「形而上学」のときもそうだったが、段落同士のつながりや、筆者の主張や問題提起の発見、文の構成の解釈に役立つと思った。しかし論拠や根拠、裏付けを探すのに時間をかけていると、文章の中の細かい意味（「象徴的な義体」など）が何かということについて考えられなくなると思った。

ケ 前回より論証がしやすかった。（ワークシートの枠に当てはめやすかった）私自身が慣れた

ということもあると思うが、根拠（具体例）の位置とそれにつく論拠が読み取りやすかった。しかし、問題提起を導き出すのに苦労した。文章全体を理解しないと（論証しないと）分からないものだったと思ったので、文章の組み立ては文章の見通し、文章の出発点を立てる上で大事だと気づいた。

コ 筆者が何を言いたいのかを明らかにするのに有効だと感じたし、どうしてもそういう主張に至ったのかを理解するのに役立つと感じた。しかし、短時間だと論の展開を理解しにくく、今回のような、主張や問いが分からない文章には非常に有効だが、「形而上学」のような主張は明らかだがその過程が分からない文章では使いにくいと思う。

オ～キの一重傍下線部において、「2（2）」における教材Aで述べたような、問題提起や筆者の主張、具体例とのつながりを捉え意識できていることを自覚している記述といえる。また、ク～コの二重傍下線部において、やはり「2（2）」における教材Bで述べたようなモデルを活用することで、論の展開から見通しを立てて、問題提起や主張を捉えるには有効と感じている記述が見られた。

これらからも、モデルの活用によって論の展開を意識するところから文章構造を捉えて、読みの理解が深まったと捉えられ、それを生徒は自覚していると言える。また、キ・コの波下線部は論証をこれからも別の課題や文章でも活用しようとしている意欲の表れであるととれる。また、ケ、コのようにモデルを活用することで二つの文章構造を比較し、違いをつかむ理解の発展を遂げていることが見られる記述もあった。

6 研究の課題と今後の展望

課題としては、まず、前述の生徒の記述ア・オ・カ・クの二重下線部から、大きく二点捉えられる。一点目はア・カ・クが指していることである。全体の文章構造を分析してつかむことには適しているが、そもそも筆者の使用する言葉の意味が分からなかった場合、その解決を見なければ先に進めず、論のつながりすら追えないことが起こることを示唆している。細かい語彙に着目して読み取ろうとしなければならぬ。奇しくも生徒の立てる問いはその傾向が強い。論のつながりが役に立つこともあるが、その逆も想定できる。論証だけでは深めようがない

ことが生じてしまうのである。手立てとして、指導者側が取り組ませようとする側面を教材と照らし合わせて吟味し活用することが必要であろう。ただし、意味が分からないと読めそうにない語句があることを高1生徒は気づいて問いを立てている。発達段階に応じたサポートを指導者側は考えればよいのではないか。

二点目は、オの原因として、練習を入れても3回しかモデルを活用していないため、慣れていなくて要素をつかみきれないということが考えられる。それはケからも推察される。解決策として、学習者は反復して慣れる必要がある。ツールミンモデルそのものでなくても、情報と情報の関係について小学校から学習を進めることになっているので、意識して専門用語も織り交ぜながら定期的に指導していけばよい。

次に、三点目の課題として、以下生徒記述サの単元2の終末におけるツールミンモデル活用の振り返りアンケートより挙げられる。

サ 解釈の差は以前より出やすいと思った。「広告の形而上学」よりも切り口の相違によって言い方が変わるんじゃないかと感じた。論理を展開するときには有効だと思ったが、具体例からのつながりが多かったので根拠→論拠が分かるような角度でも検証した方がより分かりやすいと思った。

解釈が複数ある時に、論証の切り口、つまり、根拠や論拠などの要素に当てはまる内容や表現が異なるかたちで複数の表し方があるのではないかと指摘しているのである。そのことは起こり得ることである。

今後の展望として、課題三点目について他の解釈は可能かどうかの妥当性を検証しながらの授業展開を想定する、つまり、そういった探究的・協同的な学びの一環という視点での論証モデル活用も可能なのではと考えている。

また、今回の研究は、同集団に対して年度当初から数えて2回の取り組みのみから述べている。他にどのような効果が望め、課題が表れるか、今後も実践・検証を重ねていきたい。

注

- 1) 間瀬茂夫「『論理』に関する知識と学力観の更新を」、『広島大学附属中・高等学校国語科研究紀要第50号』、2019年、72-73.
- 2) 富田英司・丸野俊一「思考としてのアーギュメント研究の現在」『心理学評論』第47巻第2号、2004年、191.
- 3) 東京書籍「国語総合現代文編 評論・随想 指導書」、2018年、185-186.
- 4) 論証ワークシートは間瀬茂夫の講義資料を参考にした。

引用参考文献

- * 文部科学省『高等学校学習指導要領(H30年告示) 解説国語編』東洋館出版社、2019年

Effect of Using the Toulmin Model in Reading Expository Texts

Satoko MURATAKA

Abstract:

This study aims to examine how teaching the Toulmin model helps students grasp the content, structures, and logical development of expository texts, deepen their understanding, and apply the reading experience to another text. Instruction was given to 10th year students using "Kokoku no keijijogaku" (by Iwai Katsuhito) and "Media ga tsukurushintai" (by Ogiue Chiki) . The students reported that the Toulmin model helped them grasp how the logic developed and deepened their understanding of the texts. Some reported that they were more motivated to make use of the knowledge acquired for future reading. Others reported that they compared the two texts and recognized the differences in structure.

資料 I 〈単元 1 の論証ワークシート〉

高1 説明的文章教材における論証分析表 教材「広告の形而上学」筆者 岩井克人

(問題提起/話題提示) 形而上 ← (形をたどる) (心、本質) → 形而下 (形をもとに見え)

① 広告は、形而上学的な視点から見たとき、逆説的に存在する

(問題提起に対する答え=主張1の論証) (全体の論証) 二重性をもつ存在
→ 形而上学的な視点から見たとき、逆説的に存在する

(根拠①) ① 広告と商品の間には本質的関係が
ない。商品の価値は、その間の差に
よって決まる。その差は、商品の
価値と、広告の価値との差である。
(根拠②) ② 広告は、商品の価値を
高めるものである。(商品)

(注釈1) ① 広告と商品の二重の価値を
資本主義はとらえている

(論拠:理由付け) ① 消費者は広告という媒介を通じて初めて商品を比較できる。
② 広告は、貨幣と同様、形而上学的な二重のものである。

(裏付け) ① 商品の価値は商品の差異に還元できない。広告だけでは商品の価値は
分らない。
「重た物」、「貨幣」、「言語」はものの本質を表すことはできない
(例)「言語」である「りんご」を認識しただけでは、「りんご」の意味がたては
れない。

(問題提起に対する答え=主張1) ① あくまで商品の媒介としての役割をもつだけの広告が、商品と同じように
価値をもつてはならない。形而上学的な逆説的な存在である。

(主張1に対する筆者の意見=主張2) ② 広告は形而上学的な視点から見たとき、逆説的に存在する。その逆説性を認識することは
人々の気づきにくい。したがって、それをとらえるには差異性を持つ言語を用いる
必要がある。

資料 II 〈単元 2 の論証ワークシート〉

〈前半の論証〉

高1 説明的文章教材における論証分析表 教材「メディアがつくる身体」筆者 萩上チキ

(問題提起) ①

(前半の主張の論証) (根拠) (裏付け) (論拠:理由付け) (主張)

① 社会の身体は、個人が持つ身体とは異なる。社会の身体は、社会的に構築された身体である。そのイメージ自体である。そのイメージをめぐる人々の競争を繰り返す。

② 社会の身体は、個人が持つ身体とは異なる。社会の身体は、社会的に構築された身体である。そのイメージ自体である。そのイメージをめぐる人々の競争を繰り返す。

③ 社会の身体は、個人が持つ身体とは異なる。社会の身体は、社会的に構築された身体である。そのイメージ自体である。そのイメージをめぐる人々の競争を繰り返す。

④ 社会の身体は、個人が持つ身体とは異なる。社会の身体は、社会的に構築された身体である。そのイメージ自体である。そのイメージをめぐる人々の競争を繰り返す。

⑤ 社会の身体は、個人が持つ身体とは異なる。社会の身体は、社会的に構築された身体である。そのイメージ自体である。そのイメージをめぐる人々の競争を繰り返す。

⑥ 社会の身体は、個人が持つ身体とは異なる。社会の身体は、社会的に構築された身体である。そのイメージ自体である。そのイメージをめぐる人々の競争を繰り返す。

⑦ 社会の身体は、個人が持つ身体とは異なる。社会の身体は、社会的に構築された身体である。そのイメージ自体である。そのイメージをめぐる人々の競争を繰り返す。

⑧ 社会の身体は、個人が持つ身体とは異なる。社会の身体は、社会的に構築された身体である。そのイメージ自体である。そのイメージをめぐる人々の競争を繰り返す。

⑨ 社会の身体は、個人が持つ身体とは異なる。社会の身体は、社会的に構築された身体である。そのイメージ自体である。そのイメージをめぐる人々の競争を繰り返す。

⑩ 社会の身体は、個人が持つ身体とは異なる。社会の身体は、社会的に構築された身体である。そのイメージ自体である。そのイメージをめぐる人々の競争を繰り返す。

〈全体の論証〉

高1 説明的文章教材における論証分析表 教材「メディアがつくる身体」筆者 萩上チキ

(問題提起) ①

(全体の主張の論証) (論拠) (根拠) (裏付け) (論拠:理由付け) (主張)

① 社会の身体は、個人が持つ身体とは異なる。社会の身体は、社会的に構築された身体である。そのイメージ自体である。そのイメージをめぐる人々の競争を繰り返す。

② 社会の身体は、個人が持つ身体とは異なる。社会の身体は、社会的に構築された身体である。そのイメージ自体である。そのイメージをめぐる人々の競争を繰り返す。

③ 社会の身体は、個人が持つ身体とは異なる。社会の身体は、社会的に構築された身体である。そのイメージ自体である。そのイメージをめぐる人々の競争を繰り返す。

④ 社会の身体は、個人が持つ身体とは異なる。社会の身体は、社会的に構築された身体である。そのイメージ自体である。そのイメージをめぐる人々の競争を繰り返す。

⑤ 社会の身体は、個人が持つ身体とは異なる。社会の身体は、社会的に構築された身体である。そのイメージ自体である。そのイメージをめぐる人々の競争を繰り返す。

⑥ 社会の身体は、個人が持つ身体とは異なる。社会の身体は、社会的に構築された身体である。そのイメージ自体である。そのイメージをめぐる人々の競争を繰り返す。

⑦ 社会の身体は、個人が持つ身体とは異なる。社会の身体は、社会的に構築された身体である。そのイメージ自体である。そのイメージをめぐる人々の競争を繰り返す。

⑧ 社会の身体は、個人が持つ身体とは異なる。社会の身体は、社会的に構築された身体である。そのイメージ自体である。そのイメージをめぐる人々の競争を繰り返す。

⑨ 社会の身体は、個人が持つ身体とは異なる。社会の身体は、社会的に構築された身体である。そのイメージ自体である。そのイメージをめぐる人々の競争を繰り返す。

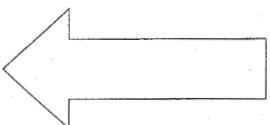
⑩ 社会の身体は、個人が持つ身体とは異なる。社会の身体は、社会的に構築された身体である。そのイメージ自体である。そのイメージをめぐる人々の競争を繰り返す。

「メディアがつくる身体」
目標 初読の感想を記録する

一 初読の感想を書こう。

か	の	い	し	イ	か	創	最
と	最	ア	ア	ア	初	初	初
知	初	に	が	た	に	に	に
る	や	表	人	し	こ	と	と
こ	中	現	々	か	で	筆	と
と	盤	が	に	し	筆	者	ま
が	を	筆	お	し	者	が	は
で	読	者	よ	最	が	何	は
き	み	独	い	後	の	を	自
る	進	特	か	の	段	分	分
よ	め	新	し	た	落	の	身
う	て	い	と	影	に	注	の
に	し	身	思	響	を	自	の
し	筆	体	っ	を	ニ	の	身
た	者	能	た	ま	の	文	の
い	の	力	獲	た	文	章	の
	主	を	得	五	全	体	の
	張	残	す	泉	体	下	の
	が	た	る	落	表		
	何	の	文	と			
	台	の	章				

変化した原因は……



問題提起や主張がと小ながら物理
解できた。
。抽象的な表現の意味が分かった。
。根拠をもとに論拠を考えることができた。

二 学習しての感想

メディアは自分たち人間の身体を急激に変化させ、その身体は「ミ
ニケーン」によってつくりだされるようになった。人々は新たなメディアに不
安を感じ、批判を日常的に言うようになった。論争を繰り返
すのだと分かった。人間が住み出したメディアによって、人間の生活は変
わってきたのである。現在の社会では人間がメディアによって縛られて
いる。メディアによって便利にはなったが、社会がメディアによって進められ
ると人間は役割も失ってしまったため、ある程度は人間がメディアを抑制する
力は必要だと思おう。